

# 明治以降昭和二十年までに熊本で発行された医学医事雑誌

岡村良一

〔要旨〕明治初期の我が国では各地で医学医事雑誌が盛んに発行された。本論文では明治以降第二次大戦終了の昭和二十年までの、熊本における医学医事雑誌の発行はどのようであったかを、熊本大学図書館や肥後医育記念館、熊本県立図書館に保存された史料を調査した。その結果、明治十六年（一八八三）に『輔元会雑誌』が発行されてから昭和二十年（一九四五）までに、十五の医学医事雑誌が発行されていたことが分かった。そのうち、漢方医学によるものが一つ、他の十四は西洋医学によるものであった。十四の西洋医学による医学医事雑誌のうち、原著を掲載するための純粋の学術雑誌は七つであり、そのうち一つは欧文雑誌、他の六つは和文雑誌であった。六つの和文の学術雑誌は途中で改名され、発行団体も変わってはいるが、時間的には切れ目無く発行されていた。その他七つのうち、三つは医育機関から、他の三つは医師会・衛生団体からの発行、一つは私立の病院からであった。発行された十五の雑誌のうち、欧文雑誌と和文雑誌の一つは昭和二十年の時点で発行されており、現在にも引き継がれている。

キーワード——熊本で創刊、明治以降昭和二十年まで、医学医事雑誌

## はじめに

明治初期のかなり早い時期から、わが国の各地で医学医事雑誌が発行されている。<sup>1)</sup>

熊本ではどのようなであったかを知りたく論文を検索したが、熊本で発行された医学医事雑誌について論じたものは武内<sup>2)</sup>のものを見出すことが出来たのみであった。

そこで熊本大学図書館や熊本の医学の史料を蒐集展示した肥後医育記念館、熊本県立図書館などに保存されている史料を検索した結果、熊本でも明治十六年以降昭和二十年までに十五の医学医事雑誌が発行されていることが分かった。

本論文では明治以降昭和二十年(敗戦)までの間に、熊本で発行された医学医事雑誌について創刊年順に報告する。但し、各講座や研究施設から出されている同門会誌や年報に類するものは省いた。

## 一、輔元会雑誌・熊本医学会雑誌・熊本県医学会雑誌

この三つの雑誌はいずれもそれぞれの会の機関誌である。会の名称の変更により機関誌の名称も改名されたものであるが、号数は継続されているので、ここに一括して述べる。

なお、熊本医学会雑誌はここで述べる明治二十八年(一八九五)発行のものと、後で述べる大正十四年(一九二五)に創刊され現在も発行されているものの二つがある。本論文では前者を熊本医学会雑誌(旧)、後者を熊本医学会雑誌(新)と区別して記載する。

## (一) 輔元会雑誌

輔元会雑誌は明治十六年(一八八三)に輔元会東京部会から発行されたものと、明治十九年(一八八六)に輔元会熊本部会から発行されたものの二種がある。

輔元会とは「輔元会雑誌緒言」<sup>(3)</sup>によると

……明治十三年暮春之月我熊本県知友京ニ在ル者相団結シテ一会ヲ設ク名ケテ輔元会ト云フ敢テ汎ク天下ノ医学者ニ謀ルニアラス唯同県人ニ限り互ニ交誼ヲ厚フシ品行ヲ正フシ徳々相戒飭シ切々相磨励シ其実験スル所ヲ講シ其聞見スル所ヲ演ヘ疑惑スル所アレハ之ヲ衆員ニ質シ發明スル所アレハ之ヲ衆員ニ示シ以テ知識ヲ博メ學術ヲ明ニス……十五年初夏熊本ニ於テ有志ノ諸賢新タニ一会ヲ起シ我輔元会ト聯合セリ依テ部ヲ分テ東京部熊本部ト為シ共ニ我道ノ益々進歩セン事ヲ謀ル……

と述べられている。すなわち、輔元会とは東京在住で熊本県出身の医学者による「専門の学会」<sup>(4)</sup>として明治十三年(一八八〇)の春遅く、東京に設立されたものである。その後、明治十五年(一八八二)初夏に熊本にも医学会と称する学術団体が起こり、東京にあつた輔元会と連合しそれぞれ輔元会東京部、輔元会熊本部が誕生したものである。<sup>(5)</sup>

い、東京部会発行の輔元会雑誌

輔元会雑誌の発行については「輔元会雑誌緒言」<sup>(3)</sup>の中で

……雖<sup>シカトイヘドモ</sup>然<sup>イカシ</sup>道路隔遠復タ奈何トモスル事ナシ是ニ於テ雑誌ヲ刊行シ凡ソ事此会ニ係ルモノ及ヒ医術上に裨益スル事實アレハ則<sup>スナワチ</sup>之ヲ登録シ以テ互ニ報導

することとなつたと述べ、さらに

東京ハ繁華ノ地最モ事ヲ成スニ便ナリ故ニ東京部ニ於テ之ヲ発刊シ以テ同会諸員ニ頒ツ敢テ世ニ公ニスル者ニ非サルナリ

と述べている。すなわち、当時はまだ交通通信手段が発達していなかったため、輔元会に関する事項や医術上有益なことなどを会員に限り報道するため雑誌が刊行されたことが分かる。

このようにして輔元会雑誌第一号は明治十六年(一八八三)八月十五日に東京部から発行されている。

この間の事情につき明治十六年（一八八三）九月十五日発行の輔元会雑誌第二号には「輔元会総則」<sup>(6)</sup>を掲載し次ぎのよう述べている。

会員決議ノ上明治十六年八月ヨリ雑誌ヲ発兌ス依テ本号ヨリ逐次規則ヲ登録ス

と述べ、次いで、

#### 輔元会総則 第一章

今此ニ在県下及ヒ在京ノ医学製薬学ノ徒相共ニ策リテ一社ヲ設ケ其ノ志ス所ヲ達セシメントス……

第一条 本社ヲ名テ輔元会ト云フ

第十一条 各社ヲシテ互ニ智識ヲ交換セシムル為メニ毎月一回雑誌ヲ発兌シテ之ヲ衆社員ニ頒布ス

第十二条 雑誌ノ事務ハ東京社員之ヲ担当シ編輯者若干名ヲ置キ雑誌に關スル一切ノ事ヲ任ズ

輔元会雑誌（東京部発行）の創刊当時の発行者、編集者について第五号までには記載はない。第三号に編集者について次ぎの記載がある。

輔元会雑誌発兌ノ事ハ熊本本部会員諸君ノ希望ニ由リ全会一致之ヲ賛成シ既ニ去歲（筆者注 明治十五年）秋ノ頃ヨリ之レニ着手スルノ筈ニテ故友中島孚<sup>マコトキミ</sup>及劣生柴三郎其編輯ノ任ヲ托セラレタリ然ルニ生等卒業試験ノ期ニ臨ミ多忙ニシテ其意ヲ果サス在再本年（筆者注 明治十五年）ニ至リシニ憶ハサリキ中島孚<sup>マコト</sup>ハ……本年四月七日急性肺炎ニ罹リ……同月十四日逝去ス……劣生柴三郎ハ幸ニ医学全科ヲ卒業スルモ未タ我カ期スル所ノ専門学<sup>スナワ</sup>則チ衛生学ヲ充分ニ修メザルヲ以テ幸イ中央衛生局ノ召ニ応シテ……衛生上視察ノ為メ……雑誌編輯ニ従事スル事能ハス……然ルニ我東京部ニハ其人ニ乏シカラス諸君ノ尽力ニ由リテ既ニ去ル八月ヨリ之ヲ発兌セラレテ二回ニ至レリ……

明治十六年十月十三日 北里柴三郎敬白

このことから、編集者は北里柴三郎および中島孚の二人で発足したものと考えられる。二人は共に古城医学校及び病

一院の出身であり、北里柴三郎は東京大学医学部を明治十六年（一八八三）四月二十一日に卒業しているので在学中に輔元会雑誌編集に携わっていたこととなるが、中島 孚は卒業試験の途中で病没のため卒業に至っていない。<sup>(9)</sup>

輔元会雑誌（東京部発行）のその後の経過をみると、第六号（明治十八年二月刊行）から雑誌名が『輔元会刀圭新誌』と改名されているが、号数はそのまま続いている。改名の理由については記載がない。

第六号に初めて編集者などが記載されている。発行所は東京府神田区今川小路一丁目五番地 井野春毅、編輯人が本島三平である。本島三平は古城医学校及び病院の出身者で、明治九年（一八七六）七月十四日開校の県立熊本医学校の入学者名簿<sup>(10)</sup>にも名前がある。井野春毅については不明であった。

目次は輔元会雑誌（東京部発行）の第八号から記載されている。

輔元会雑誌（東京部発行）の内容や頁数、雑誌の大きさをみると、第一号は二十七頁からなり、「輔元会雑誌緒言」と「学説」及び「雑録」から構成されている。学説は現在の総説に当たると考えられ、第一号では「細胞分生説」及び「解剖之説」が掲載されている。雑録には県内のみでなく国内外の主だった医事や人事に関する記載が見られる。

その後は毎号一ないし三編の学説と、現在の原著論文に相当すると思われる数編の「実験」が見られる。雑誌の大きさはA5判とほぼ同じ大きさである。頁数は総てを通して平均三十六頁であった。

輔元会雑誌（東京部発行）は熊本県立図書館に保存されており、その第一号は山崎文庫に、<sup>(11)</sup>第二号から第十号まではそれとは別に保存されている。ただし、そのうち第四号、第七号、及び第九号は保存されていない。

第十号が最終号であるかどうかは、記載がなく不明である。

輔元会雑誌（東京部発行）は熊本大学図書館本館及び医学部分館にも肥後医育記念館にも保存されていない。また、『学術雑誌総合目録』<sup>(12)</sup>にも記載されていない。

なお、熊本県立図書館には上記のものとは別に『輔元会刀圭雑誌 第一号』という雑誌が保存されている。これと先

に述べた『輔元会刀圭雑誌』との関係などについての記載はなく、その関係は不明である。発行年月日も印刷されていない。ただし、巻末に手書きで明治十七年（一八八四）二月と記載されている。

#### ろ、熊本発行の輔元会雑誌

東京で発行されていた輔元会雑誌が熊本で発行された経緯について、明治十九年（一八八六）五月十五日の輔元会雑誌の第一号の緒言に次ぎ記載がある。<sup>13</sup>

本会東京部幹事医学士北里柴三郎君客年欧州ニ航行セラレシ後山田謙次君其後撰ニ当リ東京部ノ会則ヲ改革シ雑誌編輯ヲ以テ熊本部ニ託サレタリ因テ今年ヨリ更メテ官ニ請ヒ題号ノ如ク雑誌編輯ヲ熊本ニ於テ挙行スル事トナレリすなわち、輔元会雑誌（東京部）の編集を担当していた北里柴三郎が欧州に留学したため、規則を改正し輔元会熊本部で雑誌の発行を担当することとなり、改めて輔元会雑誌第一号から発行されるようになったものである。

輔元会雑誌（熊本部）の発行当時の発行者、編集者及び印刷所については、第一号の巻末に発行所は「熊本県熊本市呉服町三十五番地 愛甲義実」と書かれており、表紙には「輔元会社」と書かれている。編集者は「田代文基」である。

愛甲義実は熊本市呉服町で開業中の休職軍医で、北岡仮病院の教官も務めた。また、田代文基はかつて古城医学学校の職員、のち通丁病院長を務めている。<sup>15</sup>

印刷所は「熊本県熊本市古城堀端百十四番地 活版舎」と書かれ、熊本市内で印刷されたことが分かる。この活版舎は明治六年（一八七三年）五月二十七日に水島貫之・伊喜見文吾らにより創業された熊本最初の活版印刷所である。<sup>16</sup>

輔元会雑誌（熊本部）は明治十九年（一八八六）五月十五日付で第一号が発行された後、明治二十二年（一八八九）七月の第三十五号まで発行され、第三十六号から熊本医学会雑誌（旧）と改称されている。

輔元会雑誌（熊本部）にはすべての号に目次が付けられている。各号には現在の原著論文に当たると思われる「実験」が二ないし六編掲載されている。その他に、「病体解剖記録」や「顕微鏡会」の記録、医薬分業や医師の守秘義務、欧州

の医界を論じた「論説」および「雑録」がみられる。

輔元会雑誌(熊本部)の大きさは輔元会雑誌(東京部)と同じくA5判であり、頁数は最低三十五頁から最高六十頁に及んでいる。

輔元会雑誌(熊本部)の第一号は熊本県立図書館の山崎文庫に保管されている。それ以降は熊本大学医学部内の肥後医育記念館に保管されている。

## (二) 熊本医学会雑誌(旧)

先に述べたように輔元会雑誌(熊本部)は明治二十二年(一八八九)に熊本医学会雑誌(旧)第三十六号と改名された。輔元会雑誌(熊本部)第三十三号によると、輔元会という名称では「如何なる会社」であるか分からないので、一目瞭然本会の性質を了解されるように「輔元会ヲ熊本医学会ト改称ス」ることとなったのである。この会名の変更に伴い、輔元会雑誌(熊本部)は第三十五号まで発行され、その次の号から熊本医学会雑誌(旧)第三十六号として発行されている。

輔元会(熊本部)が熊本医学会(旧)へと改称されただけで、その母体は変更されていない。熊本医学会雑誌(旧)の初号に当たる第三十六号(明治二十二年八月発行)の巻末に発行所は「熊本県熊本市呉服町三丁目一番地 高見哲蔵」と書かれ、編集人は「熊本県熊本市東阿弥陀寺町一番地 隈部 閏四郎」と書かれている。

印刷所は輔元会雑誌(熊本部)と同じく活版舎である。

発行所に書かれている高見哲蔵は明治十九年十二月県立熊本医学校甲種学校第五回卒業生である。<sup>19)</sup>

熊本医学会雑誌(旧)は明治二十二年(一八八九)八月に第三十六号が発行された後、明治二十七年(一八九四)一月に第七十一号が発行される迄約四年半の期間に三十六号発行された。その後、明治二十七年三月に熊本県医学会雑誌と再び改称されその第七十二号に引き継がれている。

その間、明治二十三年（一八九〇）一月の「新年祝詞」に次ぎのように当時の現状が述べられている。<sup>(20)</sup>

……熊本医学会雑誌ハ已ニ四十一号ノ数ニ登リ各府県毎月刊行ノ医学諸雑誌中ニ就テハ頗ル高齡ノ雑誌ニシテ其名既ニ海内ニ著ル然ルニ昨年ハ私立病院ノ創立ニ際シ雑誌関係ノ各員事務甚タ繁冗ニシテ編輯ノ余力ナク夏月ハ古今未曾有ノ大地震ニ遭遇シ種々ノ障碍アリテ一時衰態ヲ来シ遂ニ二ヶ月ノ間休刊スルニ至レリ事定マルノ後諸君ノ勉勵ニ依リ漸ク旧觀ヲ快復シ今年ヨリハ少シク体裁ヲ新ニセリ諸君爾ヨ益マス奮勵アリテ続々高論卓説ヲ寄贈セラレ海内ノ諸新誌ニ一步ヲ讓ラサラン事ヲ希フ我輩不敏ナリト雖モ編輯ノ勞ニ於テ敢テ厭ハサル所ナリ……

神武天皇紀元二千五百五十年明治二十三年第一月十日

編集者 拝述

この間の熊本医学会雑誌（旧）では現在の総説に相当する「論説」と、現在の原著に当たる「実験」が一緒になり「論説及実験」として、各号三ないし十編掲載されている。また、「雑纂」として国内外の論文の抄録が数編ずつ紹介されている。その他に、「雑報」として県内外の医事情報が掲載されている。

熊本医学会雑誌（旧）は第三十六号（明治二十二年八月発行）から第五十二号（明治二十四年一月発行）まではB5判であるが、第五十三号（明治二十四年二月発行）以降はA5判となっている。その頁数は最小二十六頁から最大九十頁であった。熊本医学会雑誌（旧）の大部分は肥後医育記念館に保管されている。

### （三）熊本医学会雑誌

明治二十六年（一八九三）十月熊本医学会秋期大会において熊本医学会の解散が議決され、翌明治二十七年（一八九四）三月三日に熊本県医学会と改称することとなり、同日「熊本県医学会第一總會」が開催された。<sup>(21)(22)</sup> さらに同会において熊本県医学会規則が審議された。すなわち、次のことが可決されている。<sup>(23)</sup>

第一条 本会ヲ熊本県医学会ト称ス

第三十五条 本会ハ雑誌ヲ発行シテ会員ニ配布ス



すなわち、熊本医学会雑誌(旧)から熊本県医学会雑誌へと改称され、第七十二号に引き継がれている。

発行団体は熊本医学会(旧)から熊本県医学会へと単に名称が改称されたのではなく、母体は熊本医学会が主導者となり、当時熊本にあった熊本県医会<sup>(24)</sup>および熊本国家医学会の三団体<sup>(25)</sup>に属する新法医(西洋医)<sup>(26)</sup>による「学術上の研究」を目的とした団体である。

熊本県医学会雑誌の初号に当たる第七十二号(明治二十七年三月三十一日発行)の巻末は用紙が欠損しているため、第七十三号<sup>(27)</sup>(明治二十七年五月三十一日発行)によると、発行所は熊本医学会雑誌(旧)と同じく「熊本県熊本市呉服町三丁目 壱番地 高見哲蔵」である。編集者も同じである。

印刷所は活版舎から「熊本県熊本市新町壱丁目百弍番地 汲古堂」に変更されている。

熊本県医学会雑誌は明治二十七年(一八九四)三月三十一日に第七十二号が発行された後、明治二十九年(二八九六)九月三十日に第八十七号が発行される迄約二年半の期間に十六号が発行されている。ただし、第八十七号には最終号であるとの記載または説明はないため、第八十七号で廃刊となったかどうかははっきりしない。しかし、明治二十八年(一八九五)三月二十五日発行の第七十六号には編者による次ぎの文章が掲載されている。<sup>(28)</sup>

雑誌の興廃は学会の盛衰に拘わり学会の盛衰は病院の隆否に関する事大なりとす是を以て熊本病院の衰へてより以来学会及雑誌に及ぼしたる影響は既往の実歴に徴して明白にして編者が此の衰運の間に立ちて筆硯<sup>(29)</sup>を弄したるは偏へに本誌の余喘を維持して将来の盛運を待ちたるに外ならず……天<sup>(30)</sup>幸に我を棄てす来る四月を以て敏腕博識の士を降<sup>(31)</sup>たし以て学術進歩の基を開かんとす学会の勃興雑誌の隆盛又た期して俟つへし豈に慶すへきの至りならずや豈に賀すへきの至りならずや編者はここに維持の目的を達したることを喜ぶと共に欣然其職を退き編輯の事務を後任に譲り以て○劣<sup>(32)</sup>にして觚<sup>(33)</sup>を操りたる僭<sup>(34)</sup>の罪を謝せんとす會員諸君幸に寄稿<sup>(35)</sup>に吝ならず益々本誌後来の発達を図られんことを是れ予が最終の一囑にして又た十年至情の致す処なり

また、同頁でこの文章の前に掲載されている雑報には次ぎの文章が見られる。<sup>(28)</sup>

○県立熊本病院 同院の各医長は略決定したる赴きにて外科に学士松浦有志<sup>ウツシ</sup>太郎君眼科に豊田虎之助君婦人科産科に秋元隆次郎君内科に山田鐵藏君の四氏なりと云う

両者を考え併せると、当時県立への移管を目指していた私立熊本病院のため東京大学卒業の四人の学士が赴任することを機に熊本県医学会雑誌を廃刊し新しい雑誌にしようとの考えがあったものと考えられる。

誌名が変更になってから第八十二号までは二ないし四か月毎に発行されていたが、第八十三号からは

本号ヨリ毎月一回宛ノ発行ニ改正候ニ付イテハ熊本県医学会会員諸君ハ可成多数ノ実験、論説、演説筆記、各地景況等ノ御報導アランコトヲ願フ熊本県医学会 雑誌編輯人敬白

との会告と共に表紙に（毎月一回定時発行）と記載され毎月発行されるようになっていた。<sup>(29)</sup>

この間に発行された熊本県医学会雑誌では「論説及実験」が二ないし九編掲載されている。従来にないものとして、他の論文または成書の抄録と思われる「寄書」、「転載摘録」が二ないし九編、他に、「病理解剖」として現在の病理解剖記録、「治法彙集」、「官令」及び「雑報」などが掲載されている。

熊本県医学会雑誌はA5判の大きさであり、頁数は最小三十二頁から最大八十八頁であった。

熊本県医学会雑誌の二号目である第七十三号以下は肥後医育記念館に保管されている。熊本県医学会雑誌の第一号に相当する第七十二号は岡山大学図書館に保管されていた。

## 二、春雨雑誌

春雨雑誌は春雨社の壮年会により明治二十三年（一八九〇）一月三十一日に発刊された皇漢医学（漢方医学）の雑誌である。

春雨社とは明治十五年(一八八二)四月十九日に熊本における皇漢医家(漢方医家)により組織された団体である(筆者注)。春雨社が結成されたのは明治十四年との記載もある<sup>(1)</sup>。当時、春雨社は東京の温知社、京都の賛育社とともに皇漢医学の三大学派の一つであったという<sup>(2)</sup>。

春雨雑誌の発刊の主意については明治二十三年(一八九〇)に発刊されたその第一号の「本誌発行之主意」に次ぎのよう<sup>(3)</sup>に書かれている。

……一家ノ僻説ヲ固持シ一己ノ陋見ヲ墨守シ自カラ得タリシトテ止ム可キモノナランヤ宜シク將ニ蕪奥妙理ノアル所ヲ探究シ殊効特驗ノ存スルモノヲ撰用学理ト実地トヲ併セ徴シ進ンデ欧米ノ新説ヲ採探シ確乎動かス可ラサル医学上ノ真理ヲ定立スルノ策ヲ講スヘキナリ……我儕大ニ感スル所アリ奮発興起眼ヲ東西ニ注キ思ヲ古今ニ馳セ我党ニ関スル學術技芸ニシテ日々發生スル所ノ新説奇聞伏匿スル所ノ古経蕪奥及ヒ治験藥効地方衛生ノ要件等之ヲ編成輯録シ梓ニ付シ世ニ公ニシ彼我相益シ愈<sup>(4)</sup>進ンテ妙理ヲ發明シ殊効ヲ確識シ我党学意ノ卓越ナルモノニ發揚貫通セシメント欲ス……

また、三人の発刊の祝辞には

……温故ノ実ヲ拾ヒ実験以テ信ヲ四方ニ披メ新法ト対峙並行ワレ……  
 ……和漢古今ヲ包羅シ西洋ノ近事ニ及フマテ苟モ世ニ益アルモノ採ヲ以テ之ヲ録ス毎月一回之ヲ世ニ公ニス名ケテ春雨雑誌ト曰フ……  
 ……洋ノ東西ヲ問ワス眼ヲ古今ノ書ニ照ラシ博ク衆方ヲ採リ講習審議ヲ悉シ且ツ先輩ノ經驗等細大漏ラサス集メテ雑誌ニ登録……

とある。すなわち、和漢の古い書物のみでなく西洋医学をも採り入れ、治験藥効地方衛生をも編集することが述べられている。

しかし、春雨雑誌第一号の表紙裏に掲載されている「緒言」<sup>37</sup>には、

一 本誌ハ専ラ和漢古今名医ノ説ヲ輯録シ滿天下同志ノ士ニ分チ気声相通シ以テ斯道ノ復明ヲ計ルニ在リ……  
 一 医案ハ悉ク之ヲ傷寒金匱ニ取ル……

と記載されており、春雨雑誌は専ら漢方医の団体である春雨社の機関誌として皇漢医学（漢方医学）の存続と振興を目的として発行されたものと考えられる。実際に、第十一号からは表紙に『東洋医流』の文字が書かれている。

春雨雑誌の発行所は当時熊本市山崎町十三番地にあつた春雨社内の春雨壮年会である。

この春雨壮年会とは

我カ春雨社員中歳富ミ氣壯ニ言論雄邁銳敏ノ士一団結ヲナス此ヲ壮年会ト云フ<sup>38</sup>

と述べられている。

発行人は黄 諧、編輯人は衛藤玄甫である。<sup>38</sup>このうち黄 諧は熊本の私立医学学校春雨齋の幹事、後九州学院医学部の職員のなかにその名が挙げられている。<sup>39</sup>

春雨雑誌は明治二十三年（一八九〇）一月三十一日にその第一号が発刊されている。その後明治二十五年（一八九二）三月発行の第二十二号までは調べることが出来たが、いつまで発行されたかについては春雨雑誌そのものが『学術雑誌総合目録』<sup>40</sup>に記載がなく不明である。

春雨雑誌の内容については春雨雑誌発行時の緒言のなかに

本誌門ヲ分テ凡ソ七トス曰ク官令曰ク論説曰ク治験曰ク医案曰ク叢録曰ク文苑曰ク雑報是ナリ

と述べられている。

明治二十四年（一八九二）三月発行の第十三号からは十一回にわたり「東洋医法保存論」が掲載されている。

雑誌の大きさは当時発行されていた輔元会雑誌と同じであり、平均三十頁であつた。

春雨雑誌の第一号は熊本県立図書館の山崎文庫<sup>①</sup>に保管されている。第二号から第二十二号までは肥後医育館に保管されている。

### 三、大日本私立衛生会熊本支会雑誌

この雑誌は明治十六年(一八八三)五月二十七日に東京で発会式をあげたわが国初の民間衛生推進団体である大日本私立衛生会<sup>②</sup>の熊本支部の機関誌である。

熊本県立図書館に二種類の大日本私立衛生会熊本支会雑誌が保管されている。

その一つは明治十八年(一八八五)発行のもので、明治十八年二月七日発行の第二号から明治二十年(一八八七)四月十七日発行の第六号までの五冊であり、その第一号は保管されていない。なお、その第三号の誌名は大日本私立衛生会熊本支会日誌となっているが、その理由の説明はない。

二つ目は明治二十六年(一八九三)七月二十一日に再度第一号として発行されたものである。しかし、保管されているものは明治二十八年(一八九五)二月二十八日発行の第十号および明治二十八年九月九日発行の第十二号の三冊である。その両者、すなわち、一つ目の明治十八年発行のもの、二つ目の明治二十六年発行のものとの間の関係についての説明は見あたらず不明である。

大日本私立衛生会熊本支会雑誌発刊の目的は、その第一号が保管されていないため詳細は不明である。しかし、熊本県立図書館には大日本私立衛生会熊本支会雑誌と別個に、大日本私立衛生会熊本支会規則草案<sup>③</sup>が残されている。この規則草案は明治十七年(一八八四)七月に大日本私立衛生会熊本支会主催者総代により書かれている。保管されている第二号によると、大日本私立衛生会熊本支会第二会(ママ、筆者・第二回の意であろう)は明治十八年(一八八五)一月十一日に開催されている<sup>④</sup>。従ってこの規則草案は第一回の大日本私立衛生会熊本支会に諮られたものと考えられる。

そこで、この規則草案から大日本私立衛生会熊本支会雑誌発行の目的を探ってみると、  
本文の中に、

### 第一章 目的

第一条 当支会ノ目的ハ本会ノ旨趣ニ拠リ地方人民ノ健康ヲ保持増進スルノ方法ヲ講明シ衛生ノ知識ヲ普及セシム

ルニ在リ

第二条 当支会ハ官庁ノ諮詢アルトキハ審議シテ答上ス可シ

と大日本私立衛生会熊本支会の目的が書かれている。さらに、

### 第七章 集会

第二十六条 集会ヲ分テ總會通常会臨時会トス

第二十七条 通常会ハ毎年一月四月七月十月ノ四回トシ總會ハ更ニ之ヲ開カス毎年一月ノ通常会ヲ以テ總會トス

### 第九章 雑件

第三十八条 当支会ニ於テ毎回雑誌ヲ編纂シ当支会ノ報告及ヒ演説筆記等ヲ登録シ之ヲ会員ニ配布スヘシ

と書かれている。

以上のことから熊本支会雑誌は、熊本地方人民の健康の保持増進する方法を講明し、衛生知識を普及させるため集會を開き、その集會に於ける報告や演説筆記を掲載し会員に配布するために発行されたものである。

明治二十六年（一八九三）に再度発行された第一号の「緒言」には

衛生ノ学者陸統輩出益ス其ノ蘊奥ヲ究テ疾病ヲ未発ニ防キ防毒ヲ未熾ニ挫キ以テ人生ノ健康ヲ保全スル事ヲ謀  
レリ本誌ノ発行亦斯ノ目的ニ在ラスンハアラズ編者不敏ト雖モ亦碩学大家ノ講究スル所最モ日常ニ適切ナル論理実  
験ヲ報道シテ諸君ト共ニ衛生法ノ普及ヲ謀ラント欲ス諸君幸ニ一読ノ勞ヲ吝ム勿レ聊カ一辞ヲ陳テ緒言トス

と書かれ、健康を保全するため、適切なる論理実験を報道して、衛生の普及を図るために発行されたものである。

明治十八年(一八八五)発行の熊本支会雑誌には会頭 富岡敬明および幹事 五十村良行、大日本私立衛生会熊本支会仮事務所の記載はみられるが、編集委員会については記載されていない。<sup>(44)</sup>

明治二十六年(一八九三)に再発行の熊本支会雑誌では会頭 松平正直、副会頭 小嶋政憲および著作者兼発行者 内藤休文の名前が掲載され、発行所は大日本私立衛生会熊本支会事務所と記載されている。<sup>(45)</sup>

熊本支会雑誌の内容は、「熊本支会の記事」とそこで行われた「演説の要旨」、「寄稿」および熊本支会事務所からの「会務報告」である。

頁数は明治十八年(一八八五)発行のものも明治二十六年(一八九三)発行のものもほぼ同様で三十六頁前後であり、雑誌の大きさはほぼA5判の大きさである。

明治十八年(一八八五)発行の熊本支会雑誌は、その第二号から第六号までの五冊と、明治二十六年(一八九三)発行のものは第一号と第十号、第十二号の三冊が熊本県立図書館に保管されている。

熊本支会雑誌は『学術雑誌総合目録 和文編』<sup>(42)</sup>に掲載されていないため、いつまで発行されたか、明治十八年(一八八五)発行のものと同治二十六年(一八九三)発行のものとの関係など詳細は不明であった。

#### 四、鎮西医報

鎮西医報は鎮西医報社から明治二十九年(二八九六)第一号が創刊された。当時活動中の熊本県医学会が明治三十年(一九一七)三月に鎮西医学会と改称された後、<sup>(46)</sup>鎮西医学会の機関誌となり、<sup>(47)</sup>大正十三年(一九二四)第二〇一号まで発行された雑誌である。

鎮西医報発刊の目的について、明治二十九年(二八九六)十一月発行の第一号に「発刊の趣旨」<sup>(48)</sup>として、

鎮西医報の起こるは今日の日進医学に副ふの微志に外ならず 鎮西医報は敢て九州の医学雑誌たらんことを期す此の二言外別に発刊の旨なし故に亦別に喋々発刊の趣旨を述ぶるの必要なしと述べられている。

さらにその発刊に至った経緯について、まず、

保曆<sup>(49)</sup>（宝曆）年中村井枕寿<sup>(49)</sup>（椿寿）先生の吉益氏の流派を汲んで古法を肥後の天地に注入せし以来と熊本の医育の歴史に触れたあと、

明治七八年の頃蘭人マンスヘルド氏の来りて銀杏城下に刀圭を執りしより最新法なる洋法は漸次勢力を得進んで甲種熊本医学学校の創設

をみたが

可<sup>オシムクハ</sup>惜明治二十年の癡校となり……熊本の医界は正さに沈淪の悲境に陥れり……県立熊本病院の設立（筆者注 明治二十八年七月）となり……私立熊本医学学校の設立（筆者注 明治二十九年十一月）となり又熊本地方病の研究となり學術に実験に実にも忙を極むることゝはなれり蓋し勢力の増加する所亦責任の増加を免れず熊本の医界が漸次頭角を現はすと共に亦た熊本の医界は一層の奮励を以て此日進医学に尽すの覚悟なからざるべからず是れ我が鎮西医報が敢て微力をも顧みず奮然熊本に蹶起したる所以なり

と記されている。

発行所は「熊本県熊本市南千反畑町式拾八番地 鎮西医報社」である。発行兼編集者の住所は発行社である鎮西医報社と同じ住所の「熊本県熊本市南千反畑町式拾八番地」の「富田鶴重」である。<sup>(50)</sup> 富田鶴重は明治二十年（一八八七）六月県立熊本医学学校甲種学校の第六回卒業生である。<sup>(51)</sup>

印刷所は熊本県医学会雑誌と同じ「熊本県熊本市新町壱丁目百貳番地 汲古堂」である。



鎮西医報は明治二十九年(一八九六)十一月に第一号が発刊されたあと順調に発行を続け第二百一号まで発行されている。最終号である第二百一号には発行年月日が記載されていない。同号には大正十二年(一九二二)十一月二十四日に開催された熊本医学専門学校小児科集談会の抄録が掲載されている。また、『學術雜誌総合目録』<sup>(12)</sup>によると鎮西医報第二百一号は大正十三年(一九二四)四月と記載されている。鎮西医報が何時まで発行されたかは正確には分からないが、大正十二年末か大正十三年初頭までは発行されていたものと考えられる。従って、二十七年間に二百一号が発行されたと考えられる。

鎮西医報の内容は熊本県医学会雑誌と同様に現在の総説と原著に相当すると考えられる。「論説及実験」が各号一ないし十編掲載されている。この「論説及実験」は大正四年(一九一五)一月発行の第百五十七号からは「原著」と改称され、総説が「総説」の項に掲載されている。

鎮西医報の原著の多くは日本語であるが、第百八十七号にドイツ語の原著論文が一つだけ掲載されている。<sup>(13)</sup>「雑纂」または「抄録」として国内外の論文の抄録が紹介されている。「雑報」には国内外の医療事情が掲載されているが、大正二年(一九一三)一月発行の百四十五号から「雑報」の数・内容共に少なくなり、第百九十一号からは「雑報」の記載がなくなり、原著のみ掲載されるようになっていく。この雑報では当時の大学内外の医療事情がよく理解されるが、雑報がなくなり鎮西医報そのものの癡刊についても全く記載がない。「雑報」が記載されなくなると同時に、発行年月日・目次の記載もなくなっている。

鎮西医報はほぼB5判の大きさであり、頁数は最低十八頁から最大三百四十一頁であった。この三百四十一頁の号は一人の学位請求論文一編のみであった。このような一人の論文だけで一号をなしているものが他にも二号あった。

鎮西医報は熊本大学図書館医学部分館にも保存されているが欠本が多い。熊本県立図書館の山崎文庫には全号が欠本なく保存されている。

## 五、熊本医学専門学校校友会雑誌

熊本医学専門学校校友会により明治四十二年（一九〇九）に第一号が創刊され、大正十一年（一九二二）第三十四号まで刊行された雑誌である。

熊本医学専門学校校友会雑誌の「発刊の辞」<sup>(53)</sup>にその発刊に至った事情が次ぎのように書かれている。

我校友会に於て、雑誌を発刊せんとするの議は、我会創立の当時に於て、既に計画せられし事業の一なりしと雖も、創設日尚ほ浅く、会員未だ甚だ多からず、加之、多数の会員は日夕校舎に出入し、親しく運動を共にし、議論を上下すべき境遇にありしを以て、未だ俄かに、雑誌を発刊して思想の交換を図るべき必要を認めざりき、然れども、僅かに五星霜を経過したる今日に於ては、六百に垂んとする会員を有し、第一回の卒業生は、既に昨年十月（筆者注・明治四十一年）を以て校門を辞し、志を四方に求めて各其發展を図りつゝあり、この時に当たり当初の計画を断行し、本誌発刊の挙あるに至りしは、誠に時機を得たるものというべし……蓋し我医専校に於て研鑽したる業績と、我病院に於て実験したる報告とは将来、続々本誌の上に現はれ、以て我校友会員が、如何に医界に貢献しつつあるかを紹介するにたらん、之れ余が本誌の将来に望みを囑する要点なり云々……之を以て、我校友の医学界に活動する機関となし、内には堅実なる文章を蒐めて校規の振蕩を図り、外には交情を暖めて、以て校友の連鎖となさんことを期す

すなわち、熊本医学専門学校校友会創立時に雑誌発行の議が持ち上がったのはいたが、時機尚早として見送られていた。五年を経過し、第一回の卒業生も出た時点で校友会雑誌を発刊することとなったものである。熊本医学専門学校校友会創立がいつであるかの記録は見出し得なかったが、第一回卒業生が明治四十一年（一九〇八）に出ているので、それより五年前とすると明治三十七年（一九〇四）、私立熊本医学専門学校設立のときであり、熊本医学専門学校校友会は専門学

校発足と同時に設立されたと考えられる。

この校友会雑誌は熊本医学専門学校卒業生が母校または病院であげた業績を原著として医学界に紹介するとともに同窓生の団結の機関誌となることを目的として発行されたものである。

熊本医学専門学校校友会会則<sup>(54)</sup>の第六条によると校友会に雑誌部がおかれている。第七条によると雑誌部は一名の部長と八名の部員により構成されている。その第九条によると「部長は各担当部を監督し部員は部長の指揮の下に各担当部の事務を処理するものとす」と決められている。従って、熊本医学専門学校校友会雑誌は熊本医学専門学校校友会の行事の一つとして発行されたものであろう。本雑誌を製本するとき裏表紙がはずされたためか、雑誌各号の最終頁に編集委員や発行所の記載が見られなかった。ただ、大正十一年(一九二二)二月に発行された第三十四号のみの巻末に「委員」として学生の四年生一名、三年生二名および二年生一名の名前が記載されている。「編集兼発行者」として「熊本県立医学専門学校内 福島務」の名前があり、「発行所」は「熊本県立医学専門学校」と記載されている。「福島務」は当時の名簿<sup>(55)</sup>によると「書記 教務課」の職員である。

先に述べた「発刊の辞」のなかで

純学術的雑誌と見るべからず、頗る多趣の観なき能はずと雖も、医学者必らずしも医学以外に興味を求む可らざるの道理なく、餅屋の主人何ぞ必らずしも酒を飲むを妨げん、之れ我年少気鋭なる青年会員が、講学の余暇に成れる筆硯の花にして、亦た以て我枚学生の趣味の一斑を窺うに足らん、云々

と述べられているように、本誌の内容は多彩である。内容は、大きく医学関係および文苑、雑報の三部に分けられる。

医学関係では各号に一ないし九編の「原著」が掲載されている。その他に「臨床講義」、医学エッセイと思われる「論説」、国内外の医学論文の「抄録」などがある。また「学位論文の要旨」が三編載せられており、その一編はドイツ語の抄録も掲載されている。すなわち、校友会雑誌とはいえ、学術雑誌の役目も担っていたことが分かる。

文苑は教職員および学生、卒業生による創作や詩、俳句、短歌、漢詩などである。

雑誌は主として熊本医学専門学校関係の行事や人事、同窓生の名簿、学生のクラブ活動の紹介等である。

明治四十二年（一九〇九）六月十日に第一号が発行された後、大正十一年（一九二二）二月二十日に第三十四号が発行されるまでの十二年八か月の間に三十四号が発行されている。保管されている最終号である第三十四号には廃刊についての記事は見あたらない。

熊本医学専門学校校友会雑誌の大きさはほぼA5判に等しい。頁数は最低五十三頁から最大三百二十四頁、平均百六十頁であった。

熊本医学専門学校校友会雑誌は熊本大学附属図書館医学部分館に保管されている。

## 六、熊本県医師会報

熊本県医師会報は、熊本県医師会にも熊本大学図書館、熊本県立図書館にも保管されていない。また、『学術雑誌総合目録』<sup>(12)</sup>にも掲載されていないため詳細は不明であった。

しかし、『熊本県医師会史』<sup>(16)</sup>によると、

県医師会の会報は明治四十二年五月三十日第一号が発行されており、第一号は明治四十一年度となっている。と記載されている。また、次項の「七、衛生時報」で触れるように、発行されていたことは事実であろう。

## 七、衛生時報

本誌は衛生時報社が熊本県医師会の委嘱を受け、熊本県医師会外衛生七団体の公式機関誌として大正七年（一九一八）に発行されたものである。

衛生時報発刊の目的についてはその「創刊の辞」<sup>(37)</sup>の中で、衛生が個人にとつても国家にとつても重要であることを説いた後

我が『衛生時報』は、上叙強健の途を世に説くの使命を以て生る。兼ねるに各種衛生団体の報告紙たるの任務を以てす。

夫れ衛生の事、時を得るも之を説くべく、時を得ざるも亦之を説かざる可からず。何ぞ場処と圏境とを問はん。しかも、之を世界の大勢に鑑み、之を我邦の現状に照らし、其要を感ずる今の時より切なるは無し。吾人微力、敢て任に耐えざるを危ぶむと雖も、一片耿々<sup>コウコウ</sup>の衷情溢れて本誌となる。豈に敢て事を好む者ならんや。豈に敢て利を嘗む者ならんや。唯秋毫だに衛生思想の普及と向上とに資するを得ば、吾人の望み足る。云々

と述べられている。

また、社告には

熊本県医師会の委嘱を以て成る本社は同医師会の外熊本県歯科医師会、熊本県結核予防協会、熊本県学校衛生会、熊本県衛生会、日本赤十字社熊本支部、済生会、の各医事衛生諸団体の報道機関として県下通俗衛生の普及に力めんとするに在り此旨公告す

と述べられている。

さらに、「熊本県医師会公文 第一号」<sup>(38)</sup>として

自今「衛生時報」及其附録を以て従来発行し来りし「熊本県医師会報」に代う

但し所属郡市医師会員には当然無料にて之を配布す 大正七年十月一日 熊本県医師会

と述べられている。

以上のことから衛生時報はそれまでに熊本県医師会から発行されていた熊本県医師会報の後続雑誌として発行された

もので、衛生思想の普及と向上を目的として発行されたものである。

発行所は衛生時報社であり、発行兼編輯人は福田令寿<sup>ヨシノブ</sup>である。

衛生時報は大正七年（一九一八）十月二十五日に第一号が発行された後、昭和四年（一九二九）十二月五日に百三十五号が発行されるまで毎月一回発行されている。

その間、大正十三年（一九二四）以降は十六頁であるが、それ以前は二十ないし三十頁であった。雑誌の大きさはA4判より僅かに大きい大きさである。

衛生時報発行の目的が衛生思想の普及と向上にあるように、衛生時報の内容は社説に相当すると考えられる「主張」、医事衛生に関する「通俗衛生講演」、「衛生時事時報」、「雑報」である。雑報は詳細に亘っているが、原著の掲載はない。衛生時報はほぼ全号が熊本県立図書館に保存されている。

#### 八、熊本医学会雑誌（新）

熊本医学会雑誌（新）は大正十四年（一九二五）に新たに発足した熊本医学会（新）の機関誌として、大正十四年二月に創刊され、現在も発行されている原著雑誌である。

熊本医学会（新）は大正十四年一月十九日に創立総会が開かれ、会則が審議された<sup>(61)</sup>。

大正十四年二月発行の（新）熊本医学会雑誌第一巻に掲載されている「熊本医学会設立趣意書」によると（新）熊本医学会は

……他の各医科大学を視ますと何れも斯学の研究機関として医学会の設があつて、日夜精励して能く研究の実績を挙げ、その効果の見事である事は吾々の能く知つてゐる所であります。従来熊本には鎮西医報がりましたが既に廢刊して居りますし、又熊本医科大学には集談会が現にありますが之れのみにては到底満足が出来ません。そこで

今回新に學術研究機関として『熊本医学会』を組織し、熊本県下並に広く全国に亘つて好學の方に加盟を求め、相率いて斯學の啓發を促し又知識の交換をして、日新醫學の新運に順応して行くことを期して設立されたものである。

また、会則には

第一条 本会ヲ熊本医学会ト称ス

第二条 本会ハ医学ノ進歩ヲ図ルヲ以テ目的トス

第三条 本会ノ目的ヲ達スル為左ノ事業ヲナス

一、定時ノ集会

二、雑誌ノ発行

第十二条 本会ヨリ発行スル雑誌ハ熊本医学会雑誌ト称シ毎年五回以上発行ス本会員ニハ無料ニテ之ヲ配布ス

と書かれている。

さらに、「会員勧誘状」によると雑誌の発行について

……教授総出にて献身的に努力致す義に有之校友各位との連絡及相互の研究機関として頗る適切ならんと相信候殊に校友各位の研究業績の御発表の如きは最歡迎する処に有之今後は等の機関を通し一層各位と母校との提携を密ならしむるを得るは勿論の儀と存候且是等の医学会雑誌は各大学共已に夫々校友を会員とし発刊致居り独り本大学のみ之を有せざるの状況にして御互に遺憾千万に付這般本会創立の経画を樹てたる次第に御座候……

と記載されている。

すなわち、大正十四年(一九二五)当時の各医科大学にはそれぞれの研究機関として医学会を持っており、その医学会が独自に医学会雑誌を持っていた。県立熊本医科大学でもそれに倣い、広く全国に好學の士を求め、医学の啓發と知識

の交換を行い、日新医学に順応することを目的に熊本医学会が設立された。同時に他の大学（医科大学）が持っていた医学会の機関誌に倣い熊本医学会雑誌を発行することとなったと考えられる。

なお、先に述べた明治二十二年（一八八九）八月から明治二十七（一八九四）年一月に発行されていた熊本医学会雑誌〔旧〕との関係についての記載は見出せなかった。

熊本医学会雑誌（新）の第一巻には記載が見当たらないが、第二巻巻末に発行所は「熊本医科大学内 熊本医学会事務所」、編集兼発行者は「熊本市千反町二十二番地 佐藤清」との記載が見られる。熊本医学会創立總會記事によると佐藤清は編集幹事であり、熊本医科大学生理学教授である。

印刷所は「熊本市昇町三番地 大同印刷株式会社」であり、鎮西医報の時と異なっている。創刊以来毎年一巻ずつ発行され、昭和四年（一九二九）以降は昭和二十年八月の敗戦直前の一時期を除いて年間原則として十二号十二冊が発行されている。

この間熊本医学会雑誌（新）の発行にも第二次世界大戦の影響が現れている。すなわち、昭和十九年（一九四四）三月二十日発行の第二十巻第三号から用紙が不足し投稿規定が改正され、論文の長さの短縮、要約の添付の中止、別刷数の半減、などの処置が取られている。さらに昭和十九年九月二十日発行の同巻第九号になると、

御承知の如く時局は決戦の段階に入り印刷は全く不能の状態に立ち到り候 就ては本誌は昨年九月号の分を印刷発行致し之れを以て暫時停刊致す事と相成候……敵機頻襲の折何卒御身御大切に奉願候

との通知が昭和二十年（一九四五）六月の日付で編輯部より出されている。さらに、第二十巻第十号は十、十一、十二月合併号として、一年後の昭和二十一年（一九四六）十月二十日に発行され、しかもこの第十号をもって第二十巻は完結となった。さらに、昭和二十年度は印刷不能であったため、この年度を飛び越え昭和二十一年一月号より第二十一巻を発行する処置がとられている。



創刊当時、縦書きであったが、昭和八年(一九三三)第九巻より横書きとなつてゐる。当初、五号活字であつたが、昭和十九年(一九四四)第二次大戦の戦況の悪化により六号活字と小さくなり、且つ、横一段組みであつたものが、二段組みとなつてゐる。戦後経済の安定した昭和三十八年(一九六三)第三十七巻より元の活字の大きさに戻つてゐるが、横二段組みのままである。

発行当初の「熊本医学会雑誌(新)の内容」<sup>(66)</sup>は「総説」「原著及実験」「臨床講義或いは臨床対照解剖示説」「外国文献抄録」「医学講習会講演録」「雑報」であつた。さらに、

本誌は臨床瑣談、診療瑣談、外国雑誌抄録等を加えて、実地医家のよき伴侶となるようなものと致し度い考へ……  
 会員諸賢には吾等<sup>ヒテユウ</sup>同人の微衷を御諒察の上、多少とも医事衛生に興味ある事項に就ては統々御投稿下され度<sup>(67)</sup>……  
 と投稿を呼びかけてゐる。特に

雑報欄は一般会員諸君にとりて最も興味深い箇所であり又相互の消息や近況等を知るに此の上なき好伴侶と存じます……同欄を利用せられ在所の医学会等に関する記事や、偕は会員の近況断片でも、旅中所見でも、診療無駄話でも事の大小を論ぜず、どしどし投稿被下<sup>クダサレ</sup>……<sup>(68)</sup>  
 との記載が見られ、同窓会雑誌としての性格も持つて発足したものと考えられる。

しかし、昭和十年(一九三五)頃から原著論文の増加と共に「原著」以外は少なくなり、原著雑誌として、特に学位請求論文のための原著雑誌としての性格を強めてきてゐる。

その間、雑誌の大きさは常にB5判である。

熊本医学会雑誌(新)は全巻が肥後医育記念館に保存されている。熊本大学図書館医学部分館に保存されているものは欠本があり全巻は揃つてゐない。

## 九、鎮西医海時報

鎮西医海時報は昭和二年（一九二七）に当時の熊本医科大学学長山崎正董<sup>マサヒコ</sup>を主幹として学内に設立された鎮西医海時報社から発行された雑誌である。

鎮西医海時報の発刊の目的およびその構成について各号の表紙（第一頁）に

鎮西医海時報は我国の内外特に九州別して東肥に於ける医学及び医事衛生に関する諸事項を収録するが、熊本医科大学、同附属医院及び実験医学研究所に関するものは成るべく詳密に之を報導する月刊雑誌であり、又同業諸氏の文芸や其の消息をも登載して枯淡になり勝な時報の貝殻から脱せんとする物である。随て内容は多種多様で百花爛発の庭園の如く、それがいづれも出来るだけ簡潔、出来得るだけ肩の凝らない様に、恰も蜜蜂が花間を来往する間にその蜜を求めて来る様に有らんことを勉めると記載されている。

先述の『衛生時報』第一〇七号の「主張<sup>(46)</sup>」に

山崎学長自ら主幹し、編集し、校正し、執筆して『鎮西医海時報』を出される。世界の医事から熊大の消息までを網羅するが、特に熊大、同医院、実研の消息は祥密を極むる。第一号の寄稿者を見ても博士が十数人。こんな旺な雑誌が世に多くあろうか。しかも、斯術の為、之を無料で医家諸君に寄贈されるそうである。吾人は此の大時報の熊本に生まれたのを祝福して止まぬ。

と云う記載が見られる。

鎮西医海時報、第二号の編集後記<sup>(47)</sup>に編集主幹である山崎は自ら

此時報の編輯に大學や病院の諸君の手を煩わすのは気の毒であるし、そうかと云って別に人を雇う資力も無いか

ら、全く自分一人でやっている。……編輯が終ると校正、刷り上ると帯封、郵便局へ持たせてやつと一ト息。手伝うは家人だけ。即ち編輯局も発送部も私の自宅である……本誌第一号は去月下旬県下の医師会員諸君や、九州沖繩各県の市郡医師会正副会長や、実験医学研究所製品の特約店や、各地の醫事雜誌社等に千数百部を寄贈したのであった。

と記載している。

鎮西医海時報の発行所は鎮西医海時報社であり、その住所は当時の熊本医科大学および財団法人実験医学研究所と同じ熊本市本荘町四四〇番地である。<sup>①</sup>

発行兼編輯人は鳥巢時雄であり、主幹は黙堂山崎<sup>マサキ</sup>正董<sup>マサキ</sup>であった。鳥巢は当時の熊本医科大学幹事であり、山崎は熊本医科大学大学長であった。<sup>②</sup>

昭和二年（一九二七）七月二十七日に第一号が発刊されてから、昭和六年（一九三一）八月二十七日に第五十号で終刊されるまでの五十か月間毎月一号が発刊されている。

その第四十九号には次号での廃刊の予告が<sup>③</sup>

本誌創刊の時分は熊本医科大学は公立時代で、しかも寄附金の集纏など思はしくなく当初の大学建設計画は何時完成するか逆睹せられぬ状態でしたので、校友初め其の他の縁故者諸賢に学校及び附属医院の近情を十分に知って貰ふ必要があり、又一方には大学の研究費を補助する方法の一つとして実験医学研究所を創建したので、この事業をなるべく広く同業諸君に知っていただく必要もあり、それやこれやにて本誌を発刊することに決し、私一人にて編輯と計画とに従事しました……その間に大学は官立となり、当初の建設計画も全部完成せられ、又実験医学研究所も熊本医科大学との本支の関係消滅し谷口博士新に所長となられてから諸般の施設着々功を奏して今や逐日隆盛に向つて居るので発刊当初の目的からいへば最早是非とも本誌の発行を続けねばならぬほどの事もなくなったの

であります。……月々編輯の労苦は可なり大なるものがありますので年と共に消磨しつつある私の精力をなるべく存養して少しでも効果あるべく發揮する為には之を廃刊するに如くものは有りませぬ、よって頗る短命ではありましたが数もよろしいので来月号(第五十号)を最終として打切る事と致しました故爰に予め読者諸君に御諒解を願ひたいと存じます。

と述べられている。

廃刊の第五十号には徳富猪一郎ほか十四名からの廃刊を惜しむ文や漢詩、和歌、俳句が寄せられている。また、主幹山崎正董マサキマサキの名前で購読料の剰余金は全て返金した旨が述べられている。

先に述べた発刊の目的から分かるように、原著は掲載されていないが「実験」の項に臨床報告がある。その他、「談論」、「座談」、「雑纂」、内外の論文の「抄録」、「漫録」、「文苑」などがあるが、「雑報」に熊本医科大学や県内外の医事に関する事項が詳細に掲載されている。

雑誌の大きさはA4判よりやや大きく、新聞形式で表紙が第一頁である。頁数は最低二十四頁、最高四十頁、平均三十三頁であった。

鎮西医海時報は熊本大学図書館医学部分館に全巻保管されている。

## 十、衛生と婦人

衛生と婦人は熊本市内の私立の産科婦人科谷口病院から昭和三年(一九二八)九月に発行された通俗医学衛生雑誌である。

衛生と婦人発刊の経緯については、その「発刊の辞」<sup>(4)</sup>に次ぎのように記載されている。大正十三年(一九二七)四月に新築落成した産科婦人科谷口病院はその記念事業として毎年通俗婦人講演会を開催してきた。しかし、

来会の方々は多く熊本市内若くは付近一部の婦人に限られ、折角諸学者の貴重な講演も、一般的には普及し難いのを遺憾に思ったのであります。……此目的を達すべき、適切なる方法もがなと切に方針の改善を希うに至った……この『衛生と婦人』と名づくる月刊雑誌の発行が計画実行された。その目的は

……年一度の婦人講演会に来聴して戴く代りに、毎月一回御手許におわかち致しまして、従来耳に依って直接講演を聞いて戴きましたのを、印刷したところの記事に依って、則ち、皆さんの眼に訴えて私どもの希望を達したいというのであります。尤も本誌『衛生と婦人』の本領とするところは、学問的見地から、最も真面目に、最も通俗的に、一般衛生は固より婦人を中心としたる家庭衛生、婦人衛生方面の諸問題、衛生問答をひろく集録し、多少なりとも一般婦人がたのおために一意精進したいとの趣意を以ておこつたものであります。

と述べられている。

衛生と婦人の発行所は産科婦人科谷口病院と同じ住所にある衛生と婦人社であり、発行兼編集人は谷口弥三郎である。<sup>(15)</sup> 第一号は昭和三年（一九二八）九月二十日に創刊され、昭和十三年（一九三八）八月二十日一二〇号まで十年間に一二〇号が発行されている。

その大きさは、A5判よりやや大きく、頁数は終始十二頁に統一されている。

その内容は、「談論」や「衛生問答」、「家庭」、「医療閑話」、「雑報」、「文苑」などである。その談論や衛生問答は単に産科婦人科に関するもののみではなく、小児の健康や教育、躰に関するもの、大人の健康の問題、癌、結核予防、近視の予防など多岐にわたり、執筆者も鈴木梅太郎、石原 忍など著名な医学者である。

婦人を読者とした特徴として、一部の号ではあるが表紙にダ・ヴィンチやラファエロ、ミレーなど西欧の著名な画家により婦人を描いた名画とその解説が掲載されている。

衛生と婦人は全号熊本大学図書館医学部分館に保管されている。

## 十一、鎮西医海

鎮西医海は昭和八年（一九三三）二月に熊本医科大学内の鎮西医海社から発行された医学医事雑誌である。鎮西医海の発刊の目的およびその構成について熊本医科大学の明石真隆学長は『創刊の辞』<sup>(16)</sup>のなかで熊本の医学校に関係を有する医師、則ち学校校友、職員は勿論県内にあらるゝ医師諸君の、医事通信機関であり、

本誌の内容に関しては既に目的が上述の通りであるから、座談会にでも臨んで居る様な気持で、読まれる平易なものにしたいと思う。医政よし、学術よし、臨床談よし、又歴史的考察から各人の消息、何でもよいが、要は簡潔で、六ヶ敷しい者でも平易に砕かれて肩の凝らぬような読み物を歓迎する。結局専門外の医者にもわかる専門の医学常識を聞いたり、折にふれたる感想や消息等興味主義で綴りたいと思う。……本誌はそれ（世間に多数ある医事新聞と異なり、友人の消息に接した気持で、気安く且つ親しみを持って読まるゝ、鎮西医海の事情を伝うるのが目的と述べている。また、第八年、第一号に改めて「本誌の使命」として

本誌は熊本医科大学を中心に之れに因縁を持つ人々、即ち一方には大学並に其の前身学校の校友と、他方には県下医業者各位との親睦を保持したい目的のもとに産れた。本誌によって昇格当時に結ばれた県下医業各位との美しい情誼をいつまでも続け得れば本誌の使命は尽きる。

と述べられている。

なお、本誌は医師会の通信欄も設けたため当時の熊本県医師会長は発刊の祝辞の中で<sup>(17)</sup>

本誌の一部には廃刊になつた鎮西医海時報同様医師会の通信欄を設け、日常の業務遂行に必要な諸規定の改正

変更等を掲載して貰う予定であるから、医師会としては極めて恵まれた好条件と大いに感謝している次第であると述べている。

鎮西医海の発行所は鎮西医海社であり、その住所は当時の熊本医科大学と同じ熊本市本荘町四四〇番地である。発行兼編輯人は鳥巢時雄であり、主幹の記載はなかった。鳥巢は当時の熊本医科大学の事務官であった。

鎮西医海は通巻の号数制や巻号制ではなく年号制をとっている。従って発刊は第一年、第二号であり、昭和八年（一九三三）二月十一日に創刊され、昭和十九年（一九四四）六月十日発行の四月および五月・六月合併号が廃刊号として第十二年、第三号で終わっている。この十一年五か月の間に通巻一三四号が発行されている。

この間、創刊号から第五年、第五号まではほぼA4判の大きさであったが、第七年、第一号以降はB5判に近い大きさに変更されている。第五年、第六号から第六年、第十二号までは保管されていないため不明であり、何故、第七年、第一号から版が小さくなったかの理由も不明である。

さらに、昭和十九年（一九四四）一月発行の第十二年、第一号になると

国策に順応し紙源愛護の為本誌は自主的に整備仕候。右の要項に依れば年六回以上の発刊は制限せられ候條本誌は隔月発刊の事と相成り

と「急告」された。同昭和十九年（一九四四）六月発行の第十二年、第三号になると

周知の如く、時局は刻々重大熾烈の度を増し、戦況は遂に前戦銃後を一体たらしめて了った。此の緊急時に際し、適人適所、適時適物は其の最も要とする所、此の点に鑑み、本誌は自発的に廃刊する事となった。実は本年度に入り、資源愛護の目的の為隔月発行とし、内容の充実と記事の刷新とを企図して、再度誌上に此の旨を予告申上げた。又一方、本誌は熊本医科大学報国団と合併して団報を上梓、之をあまねく御伝へしようとして着々計画を進めて来た。

……が時局の推移は決してかような緩徐を許さぬものがあつた。ここに意を決し本誌並びに団報は断乎として長期

休刊―廃刊―の措置に出たのである。

と「廃刊の辞」<sup>(8)</sup>が掲載されている。

鎮西医海の内容は、「臨床講義」、医事随想や総説などの「談叢」、熊本で開催された地方学会の「会報」・その「抄録」、「医事ニュース」、「官報」・学内外の人事・海外便りなどの「彙報」、「医師会報」、「学生欄」、「文苑」などであり、原著はみられない。

特筆すべきは、昭和十六年（一九四一）発行の第九年、第六号以降には軍医として戦地に赴き戦死された同窓生の慰霊の記事が多くなったことと、大学でも慰霊祭が持たれたとの記事がみられることである。

鎮西医海は熊本大学図書館医学部分館にその大部分は保管されているが、昭和十二年（一九三七）発行の第五年、第六号と昭和十三年（一九三八）発行の第六年は保管されていない。また、廃刊の第十二年は保管されていないため、久留米大学図書館保管のものを調べた。

#### 十一、Kumamoto Medical Journal（熊本メディカルジャーナル）

熊本メディカルジャーナルは熊本大学医学部の前身である熊本医科大学から、国の予算により、昭和十三年（一九三八）に創刊された欧文医学原著雑誌である。現在は英文原著雑誌として継続発刊中である。

熊本メディカルジャーナル発刊の経緯についての資料は医学部事務部にも残されていない。幸いその経緯は昭和十三年（一九三八）一月発行の熊本医学会雑誌（新）、第十四巻第一号に掲載されている「欧文雑誌刊行ニ就テ」という広告から窺い知ることが出来る。すなわち、昭和十三年（一九三八）一月の日付で、熊本医学会から会員各位宛に次ぎの広告が出されている。

従来ハ原著ノ欧文抄録ヲ毎号掲載致シ居リ候ヒシモ海外ニ発送致ス雑誌部数僅少ノ為外国雑誌ニ文献トシテ引用



セラル、コトモ比較的少ナク著者各位ノ御努力ニ対シテモ洵ニ遺憾ノ次第二存居候……此際医学会雑誌欧文版ヲ刊行致シ之ヲ外国ノ著名ナル医科大学、研究所等ニ寄贈致シテハ如何トノ希望有之幹事会ニテ協議ノ結果本年ヨリ不取敢年三回(四月、八月、十二月)発行致スヤウ決定仕候 欧文雑誌ニハ原著及び従来毎号雑誌ニ添加致シタル欧文抄録更ニ本会会員ノ論文ニシテ他ノ雑誌ニ発表セラレタルモノノ抄録ヲモ掲載致ス予定ニ御座候……と書かれている。しかし、その年の十二月発行の第十二号には「欧文雑誌ニ就テ」と題して

欧文雑誌ヲ本年四月以降(年三回)刊行ノ予定ニ御座候ヒシ処先般該事業ヲ本会ヨリ熊本医科大学へ移管仕ル事ト相成候……

との広告が熊本医学会から全会員宛に出されている。

一方、熊本医学会雑誌の投稿規定を通覧すると、昭和十三年(一九三八)十一月発行の第十四巻第十一号までは和文原稿に獨、佛、英及びエスペラント語の欧文抄録を付けることと決められている。しかし、その年十二月発行の第十四巻第十二号からは「欧文抄録ハ Kumamoto Medical Journalニ掲載ス」と変更されている。

以上のことから、欧文抄録が付いているとは云え如何に優れた研究の論文であつても和文で書かれた熊本医学会雑誌(新)では海外で引用されることは少ない。従つて熊本医科大学での研究を国際的に広めるため欧文医学雑誌の必要性が望まれ、熊本医学会雑誌の欧文編の刊行が熊本医学会で計画されたものである。しかし、その後大学当局により刊行されるようになり、昭和十三年(一九三八)十二月に発行されたものと考えられる。

熊本メデイカルジャーナルの事務室に保管されている第一巻第一号を見ると、その発行は表紙に昭和十三年(一九三八)七月一日と書かれている。しかし、その巻末には昭和十三年十二月二十四日印刷、昭和十三年十二月二十九日発行と書かれた付箋が貼付されている。また、熊本メデイカル・ジャーナル第一巻第一号に添付され、ドイツ語で書かれた「発行の挨拶文」には昭和十四年(一九三九)一月と書かれている。

以上のことから、昭和十三年（一九三八）十二月の末に印刷発行され、翌昭和十四年（一九三九）一月に発送されたのであろう。

また、その表紙には発行当時の Editorial comitee として、全教授の名前が記載されている。創刊号は B 4 判で全頁六十頁からなり、内訳は原著一編と熊本医学会雑誌の欧文抄録五十三編からできている。

先に述べた昭和十三年（一九三八）一月発行の熊本医学会雑誌（新）、第十四卷第一号に掲載されている「欧文雑誌刊行ニ就テ」という広告の中に

……外国ノ著名ナル医科大学、研究所等ニ寄贈致シテハ如何トノ希望有之……

とあるように、外国の大学や研究所に寄贈されたものと思われるが、寄贈の記録はなかった。

熊本メデイカル・ジャーナルの発行当時には投稿規定は掲載されていない。先に述べたドイツ語の「発行の挨拶文」によると、熊本メデイカルジャーナルは熊本医科大学で行われた研究の原著論文および抄録を掲載したもので年に三回発行を予定されたものである。

欧文誌としての使用言語についての規定も見当たらない。先にも述べたように熊本メデイカルジャーナルの第一巻第一号が発行された年である昭和十三年（一九三八）十二月二十日に発行された熊本医学会雑誌（新）、第十四卷第十二号に掲載されている投稿規定の5）には

論文原稿ニハ必ず和文内容抄録及欧文抄録ヲ添付サレタシ、（欧文ハ獨、佛、英及ヒ「エスペラント語」トス）欧文抄録ハ熊本医科大学発行ノ Kumamoto Medical Journal ニ掲載ス

と書かれている。実際に熊本メデイカルジャーナルの第一巻第一号を見ると、原著は一編でドイツ語で書かれており、抄録五十三編中ドイツ語が四十四編、英語が八編、佛語が一編であった。

以上のことから発行当初熊本メデイカルジャーナルは熊本医科大学での研究原著論文と和文の研究論文の欧文抄録誌

として発足し、その使用言語は獨、佛、英及ビ「エスペラント語」によるとされたと考えられる。

先述の発行時に出された挨拶文のとおり年三号を目標として発行されてきた。昭和十八年(一九四三)八月一日付で第二号が発行された後、発行がなく、第二次世界大戦終結の昭和二十年(一九四五)を挟んで七年間その発行が中断されている。

戦後、昭和二十六年(一九五二)四月三十日に熊本メデイカルジャーナルの発行が再開され第四巻第一号となり、熊本大学医学部および密接な関係にある研究機関で行われた研究成果の英文原著論文雑誌となり、現在に継続されている。熊本メデイカルジャーナルは熊本大学図書館医学部分館と熊本大学医学部事務に保管されている。

## 考 按

明治以降昭和二十年の敗戦までに熊本で創刊された医学医事雑誌について調べた。其の結果、十五の医学医事雑誌が創刊されていたことがわかった。

調べることが出来た総ての雑誌の発刊された期間を棒グラフとして図1にまとめた。

十五の雑誌のうち『春雨雑誌』一つのみが皇漢医学(漢方医学)によるものであり、他の十四は西洋医学によるものであった。

また、『衛生と婦人』のみが私立の病院から刊行され医療関係者以外の婦人を対象とした通俗医学医事雑誌であった。他の十三の雑誌は医療関係者を対象として刊行された雑誌であった。

十四の西洋医学の雑誌のうち図の左端のカラムは原著を掲載することを目的とした純粋な学術医学雑誌を並べた。すなわち、二つの『輔元会雑誌』と、『熊本医学会雑誌(旧)』・『熊本県医学会雑誌』・『鎮西医報』・『熊本医学会雑誌(新)』の五つの和文雑誌および『熊本メデイカルジャーナル』の一つの欧文雑誌の六つである。

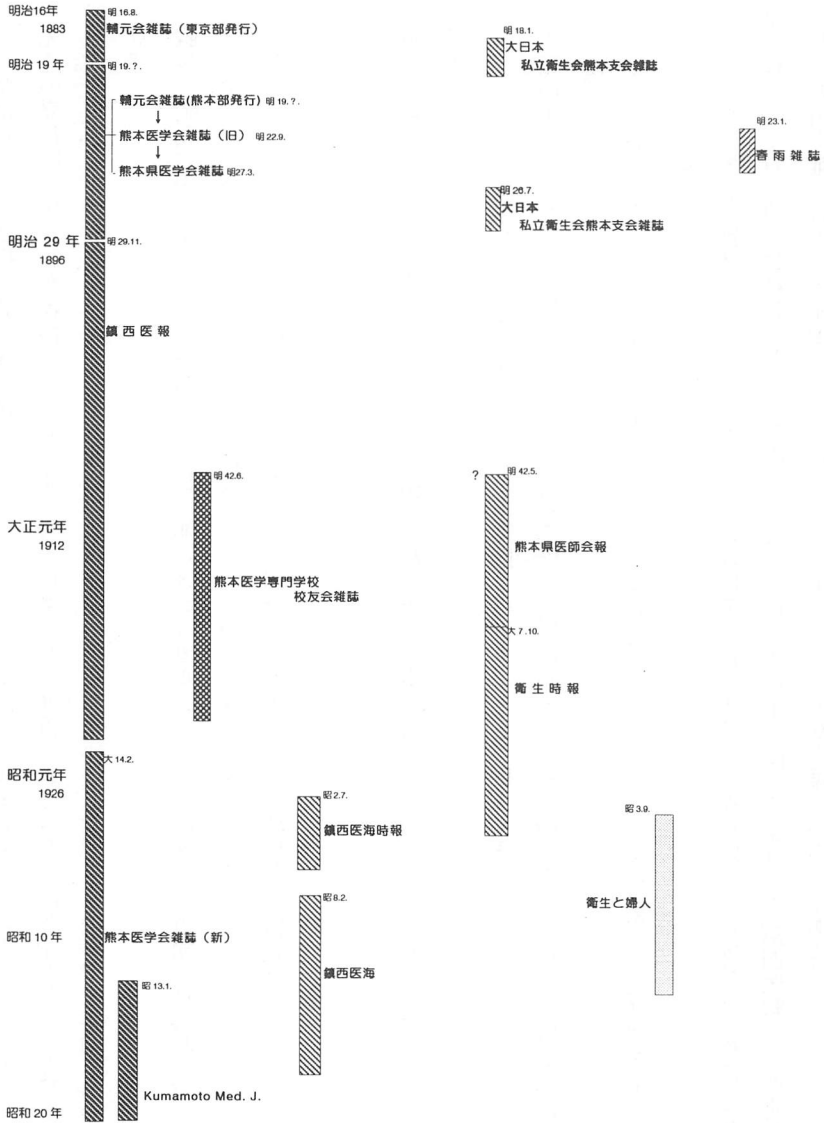


図 1 明治以降に熊本で発行された医学医事雑誌

『大日本私立衛生会熊本支会雑誌』と『熊本県医師会報』・『衛生時報』・『鎮西医海時報』・『鎮西医海』の五つは原著は掲載されていない医事雑誌である。うち、前三者は医事団体の機関誌であるが、『鎮西医海時報』・『鎮西医海』の後二者は原著は掲載されていないが、熊本医科大学で発行された同窓会報や医師会報も兼ねた内外の医学医療事情を述べた医事雑誌である。

両者の間に並べた『熊本医学専門学校校友会雑誌』には、原著も掲載されており、県内外の医事の報道・同窓会的事情さらには校友会員である学生の文苑の頁などがあり、学術雑誌と医事雑誌の中間の性格を持った雑誌であると考えられる。武内は『熊本医学専門学校校友会雑誌』を純学術的雑誌であり、今日の『熊本医学会雑誌』の前身と位置づけている。また、学術雑誌とは別個の独特の医学雑誌としての『鎮西医報』は『鎮西医海時報』・『鎮西医海』へ引き継がれたと述べている。

しかし、『熊本医学専門学校校友会雑誌』は時の私立熊本医学専門学校の校長で校友会長が「発刊の辞」で「本誌ハ、純学術的雑誌ト見ルヘカラス」と述べているように、原著以外に雑報、文苑などに頁数の半分近くがつかわれており、純学術的雑誌とは云いがたいものと考ええる。『鎮西医報』と『熊本医学会雑誌(新)』は共に原著に頁数の大部分が割かれており、雑報は少なく、純学術的雑誌と考える。『鎮西医海時報』・『鎮西医海』は熊本医科大学内から発行されていたとは云え、原著は全く掲載されていないが、内外の医学医療事情を広く掲載した医事雑誌と考える。

以上のように、明治以降熊本と発行された十五の医学医事雑誌は、純学術的雑誌と医事雑誌と其の両者の性格を持った医学医事雑誌、通俗医学雑誌および漢方医学雑誌にわけられる。

十五のうち、熊本医学会雑誌(新)と熊本メディカルジャーナルの二つは昭和二十年のの時点も継続発行されていた。<sup>(85)</sup>

- (1) 「第3章 医学研究会・医学雑誌の発展と眼科専門の研究會・雑誌の萌芽」日本眼科学會百周年記念誌編纂委員會編『日本眼科学會百周年記念誌』第一卷（日本眼科の歴史 明治篇）七七〜一〇二頁、財団法人 日本眼科学會、東京、一九九七（平成九年）
- (2) 武内忠男「熊本における医学雑誌創刊とその歩み」『西海医報』第百二十一号、一〜二頁、一九五八（昭和三十三年）
- (3) 松村主馬「輔元會雜誌緒言」『輔元會雜誌』（輔元會東京部）第一号、一〜三頁、一八八三（明治十六年）
- (4) 山田謙治「雜誌」『輔元會雜誌』（輔元會東京部）第一号、一〜三頁、一八八三（明治十六年）二十一〜二十七頁、一八八三（明治十六年）。この雑誌には輔元會成立の経緯と将来への希望が書かれている。此の雑誌によると輔元會は医学製薬学生による専門の学会と位置づけられている。
- (5) 『明治十四年（一八八二）十二月一日に発足し医事會と称した』との記載もある。「熊本医学會の起源及経歴」『熊本医学會雜誌（旧）』第四十三号、二十八〜三十三頁、一八九〇（明治二十三年）
- (6) 「輔元會總則」『輔元會雜誌』（輔元會東京部）第二号、一〜四頁、一八八三（明治十六年）
- (7) 北里柴三郎「（筆者注・題目は記載されていない）」『輔元會雜誌』（輔元會東京部）第三号、六〜九頁、一八八三（明治十六年）
- (8) 山崎正董「第二章 古城医学校及び病院 第四節職員及び生徒（附）生徒氏名」『肥後医育史』三二一〜三三三頁、鎮西医海時報社、熊本、一九二九（昭和四年）
- (9) 『東京帝国大学医科大学並同学医学部卒業生 氏名録』、東京帝国大学医学部鐵門俱樂部、東京、一九二八（昭和三年）  
北里柴三郎はその六十三頁に掲載されているが、中島 孚マコトの記載はない。「東京大学医学部卒業」『北里柴三郎記念館』学校法人北里学園、東京、二十四頁、一九八七（昭和六十二年）
- (10) 前掲文献（8）四三六〜四四二頁
- (11) この山崎文庫は官立熊本医科大学初代学長山崎正董先生の蔵書を熊本県立図書館に山崎文庫として保存したものであり、順天堂大学医学部医史学研究室の山崎文庫とは異なる。
- (12) 学術情報センター編『学術雑誌総合目録 和文編 一九九一年版』、丸善株式会社、東京、一九九二（平成四年）
- (13) 「緒言」『輔元會雜誌』（熊本本部）、第一号、一頁、一八八六（明治十九年）

著者については文末に「編集者」とのみ書かれているが、巻末の記載から田代文基と考えられる。

- (14) 前掲論文(8) 四二七頁
- (15) 前掲文献(14) 三一五頁および四二五頁
- (16) 水野公寿「明治期 熊本の新聞」二〇九頁、熊本近代史研究会、熊本、一九九三(平成五年)
- (17) 「輔元会を熊本医学会と改称したる理由」『輔元会雑誌』(熊本部、第三十三号、附録二頁、一八八九(明治二十二年)
- (18) 「会告」『輔元会雑誌』(熊本部)、第三十三号、一頁、一八八九(明治二十二年)
- (19) 前掲論文(8) 四九五〜四九七頁
- (20) 「新年祝詞」『熊本医学会雑誌』(旧)、第四十一号、一〜四頁、一八九〇(明治二十三年)
- (21) 「熊本医学会の起源及経歴」『熊本県医学会雑誌』第七十二号、五十一〜五十六頁、一八九四(明治二十七年)
- (22) 「新法医士大懇親会(熊本県医学会第一総会)」『熊本県医学会雑誌』第七十三号、五十六〜七十二頁、一八九四(明治二十七年)
- (23) 「熊本県医学会規則」『熊本県医学会雑誌』第七十二号、六十五〜六十九頁、一八九四(明治二十七年)
- (24) 明治二十三年四月十一日に発会した「漢洋両派の聯合団体」である。「熊本新法医士大懇親会」『熊本医学会雑誌』第七十一号、付録、一八九四(明治二十七年)
- (25) 「国家及公衆医事ニ関スル學術ヲ研究シ且ツ其応用ノ普及ヲ謀ル」(熊本医学会雑誌第六十六号、五十〜五十一頁、一八九三(明治二十六年)) ことを目的に明治十六年に中央に設立された団体の目的に賛同し明治二十五年十月熊本にその支部が設立されている。『熊本医学会雑誌』(旧) 第六十五号、五十二頁、一八九三(明治二十六年)
- (26) 河喜多宗碩「新法医士大懇親会祝辞」『熊本県医学会雑誌』第七十二号、六十二〜六十三頁、一八九四(明治二十七年)
- (27) 『熊本県医学会雑誌』第七十三号、巻末、一八九四(明治二十七年)
- (28) 『熊本県医学会雑誌』第七十六号、四十三〜四十四頁、一八九五(明治二十八年)
- (29) 『熊本県医学会雑誌』第八十三号、四十五頁および表紙、一八九六(明治二十九年)、表紙にはその他に、代価及び広告料も記載されている。
- (30) 山崎正董「肥後医育史」五〇八頁、鎮西医海時報社、熊本、一九二九(昭和四年)

- (31) 深川晨堂『漢洋医学闘争史 政治闘争編』、三二一頁、医聖社、東京、一九三四(昭和九年)(復刻版、一九八一(昭和五十六年))
- (32) 前掲文献(31)、三〇四～三〇五頁
- (33) 「本誌発行之主意」『春雨雑誌』第一号、一頁、一八九〇(明治二十三年)
- (34) 志賀栗斎「祝文」『春雨雑誌』第一号、九頁、一八九〇(明治二十三年)
- (35) 深水成章「祝詞」『春雨雑誌』第一号、十頁、一八九〇(明治二十三年)
- (36) 高岡元真「祝辞口演の写」『春雨雑誌』第一号、十二頁、一八九〇(明治二十三年)
- 高岡は春雨社総代であり、後に熊本大学医学部の前身である私立熊本医学校の設立者である。
- (37) 「緒言」『春雨雑誌』第一号、表紙裏、一八九〇(明治二十三年)
- (38) 『春雨雑誌』第一号、裏表紙、一八九〇(明治二十三年)
- (39) 山崎正董「肥後医育史」五二一および五四三頁、鎮西医海時報社、熊本、一九二九(昭和四年)
- (40) 「大日本私立衛生会発会紀事略」『大日本私立衛生会雑誌』第一号、一～三頁、一八八三(明治十六年)
- (41) 『大日本私立衛生会熊本支会規則草案』一八八四(明治十七年七月)
- (42) 「大日本私立衛生会熊本支会第二会」『大日本私立衛生会熊本支会雑誌』第二号、一～二頁、一八八五(明治十八年)
- (43) 「緒言」『大日本私立衛生会熊本支会雑誌』第一号、一頁、一八九三(明治二十六年)
- (44) 「支会紀事」『大日本衛生会熊本支会雑誌』第二号、一頁、一八八五(明治十八年)
- (45) 『大日本私立衛生会熊本支会雑誌』第一号、巻末、一八九三(明治二十六年)
- (46) 「広告」『鎮西医報』第五号、巻末広告頁、一八九七(明治三十年)
- (47) 鎮西医報が東肥医学会の機関誌になったのがいつであるかの明確な記載は見いだせなかった。少なくとも創刊当時の学会名は熊本県医学会であり、東肥医学会と改名されたのは創刊の翌年である。東肥医学会で機関誌の言葉が最初に使われた記事は、明治三十六年(一九〇三)四月十五日東肥医学会春季大会での山崎正董の演題「鎮西医報に就ての希望」のなかである(『鎮西医報』第七十四号、八十一頁、一九〇三(明治三十六年))。明治三十八年(一九〇五)十月には東肥医学会規則第十七条に「月刊雑誌鎮西医報を以て機関誌とし」と明記されている(『鎮西医報』第九十四号、一九〇五(明治三十八年))。



- (48) 「発刊之趣旨」『鎮西医報』第一号、一〜二頁、一八九六(明治二十九年)
- (49) 「保暦年中」は「宝暦年中」の誤りである。また、「村井枕寿」は「村井椿寿」の誤りである。(山崎正董「第一章 再春館」『肥後医育史』六〇二八六頁、鎮西医海時報社、熊本、一九二九(昭和四年)を参考とした。)
- (50) 「鎮西医報」第一号、巻末、一八九六(明治二十九年)
- (51) 山崎正董「肥後医育史」四九七頁、鎮西医海時報社、熊本、一九二九(昭和四年)
- (52) Shinichi Takayasu: Über die Wirkung der zwertwertigen Ionen auf die Muskelregbarkeit [高安慎一(生理学教室教授)「筋肉興奮性に対する式価「イオン」の作用について」]『鎮西医報』第百八十七号、巻末(一〜三十八頁)、一九一九(大正八年)、七頁の和文抄録がついている。
- (53) 「発刊の辞」『熊本医学専門学校校友会雑誌』第一号、一頁、一九〇九(明治四十二年)
- (54) 「熊本医学専門学校校友会会則」『熊本医学専門学校校友会雑誌』第一号、一九八頁、一九〇九(明治四十二年)
- (55) 『熊本医学専門学校一覽 大正九年九月』七十二頁、一九二〇(大正九年)
- (56) 熊本県医師会「熊本県医師会史」五十三頁、熊本県医師会、熊本、一九五九(昭和三十四年)
- (57) 「発刊の辞」『衛生時報』第一号、表紙(新聞形式であるため一頁目)、一九一八(大正七年)
- (58) 「社告」『衛生時報』第一号、表紙(新聞形式であるため一頁目)、一九一八(大正七年)。なお、第二号からは本文に引用した熊本県医師会など七団体の「公式報告誌とす」と述べられている。
- (59) 「熊本県医師会公文第一号」『衛生時報』第一号、三頁、一九一八(大正七年)
- (60) 『衛生時報』第一号、表紙(新聞形式であるため一頁目)、一九一八(大正七年)、なお、福田令寿は大正十五年より第三代熊本県医師会長を務めている。
- (61) 「熊本医学会創立總會記事」(新)『熊本医学会雑誌』第一巻、八十九頁、一九二五(大正十四年)
- (62) 「熊本医学会設立趣意書」(新)『熊本医学会雑誌』第一巻、八十八頁、一九二五(大正十四年)
- (63) 熊本医学会が発足し、熊本医学会雑誌が発行された大正十四年(一九二五)当時の大学医学部、医科大学は次ぎの通りである。すなわち、東京・京都・福岡・東北および北海道の各帝国大学医学部と新潟・岡山・千葉・金澤および長崎の各官立医科

大学、大阪・京都および愛知の各府県立医科大学である。

- (64) 「熊本医学会生る 設立趣意書と会則」『衛生時報』第七十六号、五頁、一九二五（大正十四年）
- (65) 「会員勧誘状」『新 熊本医学会雑誌』第一卷、八十八頁、一九二五（大正十四年）
- (66) 「熊本医学会雑誌の内容」『熊本医学会雑誌（新）』第一卷、八十八頁、一九二五（大正十四年）
- (67) 「会員募集と投稿歓迎」『熊本医学会雑誌（新）』第一卷、九十頁、一九二五（大正十四年）
- (68) 「通信募集」『熊本医学会雑誌（新）』第一卷、九十頁、一九二五（大正十四年）
- (69) 「主張 鎮西医海時報」『衛生時報』一頁、一九二七（昭和二年）
- (70) 「編輯を終わりに」『鎮西医海時報』第二号、二十三〜二十四頁、一九二七（昭和二年）
- (71) 「熊本医科大学配置図」『熊本医科大学一覽 昭和三年十二月』卷末、一九二八（昭和三年）
- (72) 「現職員」（名簿）『熊本医科大学一覽 昭和三年十二月』五十六頁、一九二八（昭和三年）
- (73) 「謹告」『鎮西医海時報』第四十九号、一頁、一九三一（昭和六年）
- (74) 谷口弥三郎「発刊の辞」『衛生と婦人』第一号、一頁、一九二八（昭和三年）
- (75) 「衛生と婦人」第一号、十二頁、一九二八（昭和三年）
- (76) 明石真隆「創刊の辞」『鎮西医海』第一年、第一号、一頁、一九三三（昭和八年）
- (77) 谷口弥三郎「鎮西医海の発刊に際して」第一年、第一号、二頁、一九三三（昭和八年）
- (78) 「職員」『熊本医科大学 昭和九年板』一〇四頁、一九三三（昭和八年）
- (79) 「急告」『鎮西医海』第十二号、第一号、二十九頁、一九四四（昭和十九年）
- (80) 「廃刊の辞」『鎮西医海』第十二号、第三号、一頁、一九四四（昭和十九年）
- (81) 「欧文雑誌刊行二就テ」『熊本医学会雑誌（新）』第十四卷、一頁、二八二頁、一九三八（昭和十三年）
- (82) 「欧文雑誌二就テ」『熊本医学会雑誌（新）』第十四卷、十二号、卷末広告、一九三六（昭和十三年）
- (83) 「投稿規定」『熊本医学会雑誌（新）』第十四卷、十一号、卷末、一九三八（昭和十三年）の5
- (84) 「投稿規定」『熊本医学会雑誌（新）』第十四卷、十二号、卷末、一九三八（昭和十三年）の5

(85) 本論文を執筆した二〇〇〇年(平成十二年一月)の時点でもこの二つの雑誌は継続出版されている。

(熊本大学名誉教授)

## Medizinische Zeitschriften, die seit der Meiji-Zeit bis zum Jahre 20 der Showa-Zeit (1945) in Kumamoto erschienen

Ryoichi OKAMURA

Anfang der Meiji-Zeit erschienen viele medizinische Zeitschriften in verschiedenen Städten in Japan. In der vorliegenden Arbeit wurde anhand des geschichtlichen Materials untersucht, das in den Bibliotheken der Universität Kumamoto sowie der Präfektur Kumamoto und in Higo Iiku-kinenkan (Medizinisch-pädagogischem Museum) aufbewahrt ist. Das Material umfaßt medizinischen Zeitschriften in Kumamoto, die vom Anfang der Meiji-Zeit bis zum Ende des zweiten Weltkrieges (1945) erschienen sind.

Daraus ergab sich, daß nach dem Erscheinen der “Zeitschrift von Hogenkai” im Jahre Meiji 16 (1883) bis zum Jahre Showa 20 (1945) 15 medizinische Zeitschriften herausgegeben wurden. Eine Zeitschrift behandelte die altchinesische Medizin und die anderen 14 die europäische Medizin.

Unter den 14 medizinischen Zeitschriften zur europäischen Medizin waren 7 rein wissenschaftliche Zeitschriften, um Original-Arbeiten zu veröffentlichen. Davon wurden eine in europäischen Sprachen und die anderen 6 in japanisch geschrieben. Obwohl bei den 6 wissenschaftlichen Zeitschriften

inzwischen Titel und Herausgeber in japanisch geändert wurden, erscheinen sie zeitlich ohne Unterbrechung.

Von den anderen 7 Zeitschriften erschienen 3 von einer medizinischen Hochschule und 3 andere von Ärztevereinen und den hygienischen Verbänden. Eine andere war eine von einem privaten Krankenhaus herausgegebene volkstümlich-hygienisch-medizinische Zeitschrift.

Unter den 15 war eine Zeitschrift in europäischen Sprachen und eine in japanisch. Sie wurden Showa 20(1945) herausgegeben und erscheinen heute noch.